

研 究

母子家庭で育った青年の家庭経験の語りの
実際についての質問紙調査石田 彩花¹⁾, 入江 亘²⁾, 菅原 明子²⁾, 塩飽 仁²⁾

〔論文要旨〕

本研究の目的は母子家庭で育った青年における (1) 自身の家庭経験や母子家庭での悩みの語りの実態, (2) 家庭経験や悩みを打ち明ける意欲と行動に影響する要因, (3) 打ち明ける機会があったことで得られた利点を明らかにすることである。母子家庭で育った青年に対し WEB 質問紙調査を行い, 語りの欲求の程度と, 語りの阻害・促進要因および語りの利点について選択式の回答を求め, 回答を統計学的に分析した。結果, 200 人から回答を得た。語りの欲求は 100 人 (50%) が「ある」と回答し, そのうち 65 人が実際に悩みを打ち明けていた。語りの阻害要因は, 悩みを打ち明けられなかった者の方が, 偏見が原因で話題にできなかった経験を多くしていた。打ち明けられた相手として多くみられた回答は, 同じ母子家庭の子ども, 気を遣わないで良い相手であった。最も多くの回答者が挙げた語りの利点は母子家庭での家庭経験の受容であった。結果から, 子どもが周りに偏見があると感じているほど, 打ち明けることが難しくなることが示され, 同じ境遇にある友人や信頼できる友人の存在をはじめとした自身の家庭経験や母子家庭での悩みを語ろうと思える場や機会の提供を推し進める必要があると示唆された。また, 語りは母子家庭の子どもにとって複数の利点をもたらすと考えられた。母子家庭の子どもにさまざまな利益をもたらす語りの場を支援するために, 周囲の支援者が, 母子家庭に対してもつ先入観を問い直す必要がある。

Key words : 母子家庭, 青年, 子ども, 語り, 偏見

I. 目 的

平成 28 年現在, 母子世帯 (母子以外の同居者がいる世帯を含めた全体の母子世帯数) は約 123 万世帯¹⁾と言われている。これは, 児童のいる約 1,166 万世帯²⁾の約 10% に相当し, 母子家庭は日常的にみられる家庭構造の一つとなっている。母子家庭世帯は, 両親のいる家庭や父子家庭の世帯に比べ経済的な問題を抱えやすい³⁾。加えて, 飯田⁴⁾は母子家庭の子どもに少年犯罪率が高い理由に関して, 低所得による周囲との格差とそれに対する劣等感や差別を不満に思うことと結び付けており, 母子家庭で育つ子どもには, 健康を支える専門職による心理社会的支援の提供が必要である。

母子家庭で育つ子どもへの心理社会的支援に関して, 本村⁵⁾はインタビュー調査から, 家庭生活のありようを安心して開示できる場所があることが母子家庭の子どもの精神的支援に重要と示している。さらに, 上野・李⁶⁾や志田⁷⁾が行った研究でも承認や語りの場の必要性が述べられている。また, これらの先行文献において, 母子家庭の子どもについて「普通じゃない子ども」という偏見や, 母子家庭であることを話題にした際に場に流れる同情, 過剰な配慮 (ネガティブ・サポート), またそれらにより自身と自身の家庭にネガティブなイメージをもつことが, 母子家庭で育つ子どもが家庭経験や悩みを話すことを難しくしていることが報告されている。しかしこれらの研究は, 家庭経験を語ること

An assessment on narratives on childhood experience by adolescents raised in fatherless households
Ayaka Ishida, Wataru Irie, Akiko Sugahara, Hitoshi Shiwaku

(32079)

1) 東北大学医学部保健学科看護学専攻 (現東北大学病院) (学生)

受付 20. 9.11

2) 東北大学大学院医学系研究科保健学専攻 (研究職)

採用 22. 2.15

のできる場の必要性和母子家庭の子どもがそういった場をもつことの困難を示しつつも、家庭経験を語ることに對する母子家庭の子ども自身の考えや意義についてほとんど触れていない。この課題に取り組むことで、母子家庭の家庭経験の語りの場を提供することや語ることについての重要性、語りを阻害する要因と促進する要因についてより深く具体的に示すことができ、母子家庭の子どものニーズに合わせた支援につながると考える。

そこで、本研究は、母子家庭で育った青年における(1)自身の家庭経験や母子家庭での悩みの語りの実態、(2)家庭経験や悩みを打ち明ける意欲と行動に影響する要因、(3)打ち明ける機会があったことで得られた利点を明らかにすることを目的とした。

II. 対象と方法

1. 研究デザイン

研究デザインは Web を用いた横断的質問紙調査である。母子家庭の子どもに関する先行研究では、インタビュー調査による限られた調査人数による手法が選択されており、対象者数を広げた知見が十分に示されていない。また、インタビューによって深く家庭経験を明らかにするためには、自身が母子家庭で育ったということを研究者に開示する必要がある、質問紙に比べて精神的負担を伴うことが想定された。そこで、本研究では、全国から調査対象者を募ることが可能であり、回答者は1人で、自分の設定した環境で手軽に調査に参加でき、また、回答が匿名化され回答者への負担を軽減することが可能な Web による質問紙調査の方法を選択した。

2. 用語の定義

本研究では、先行研究に述べられているような母子家庭で育つ子どもが家庭経験や悩みを話すことが難しい状況をより具体的に捉えるため、語りに関する用語について、「語る」、「打ち明ける」、「話題にする」を以下のように明確に区分して表記する。「語る」は思いを文字や言葉で伝えること、「打ち明ける」は自身の家庭経験や母子家庭での悩みについて語りたが語れない、語って良いのだろうかという葛藤があるなかで他者に伝えること、そして「話題にする」は、語りたが語れないといった認識自体がなく、普段の会話の一部に自然と母子家庭に関する内容が含まれること

を指すこととした。なお、「語る」は「打ち明ける」と「話題にする」の両者を包含した、葛藤の有無を問わない他者への伝達を示す用語として用いた。

3. 研究対象者

調査対象者は、日本において死別・離別・未婚のいずれかを理由にした母子家庭で育ち、調査時点で複数回親の死別や離婚、母親の再婚や結婚を経験していない20歳以上25歳以下の青年である。母子家庭の子どもが家庭での経験を語ることにについて明らかにするためには、振り返りバイアスに配慮しながら、今現在母子家庭で育つ子どもを対象とするよりも、ある程度成熟し、自身の経験を振り返ることができる年齢に至っていることが適切と考えたため、対象者の年齢を上記のように規定した。

4. 調査項目

i. 対象者の属性

性別、母子家庭になった理由(死別、離別、未婚)、母子家庭になった時期を尋ねた。

ii. 自身の家庭経験や母子家庭での悩みを語る経験

まず、自分の家庭経験や母子家庭での悩みを誰かに打ち明けたいと思ったことがあるかについて「ある」、「少しある」、「ほとんどない」、「ない」の4件法で尋ねた。また、実際に自分の家庭経験や母子家庭での悩みを誰かに打ち明けたことがあるかについて「ある」、「ない」の2件法で質問した。

さらに、自身の家庭経験や母子家庭での悩みを語る経験について、先行研究⁵⁻⁷⁾を参考に語れなかった経験に関する9項目と話題にできていた経験に関する1項目の計10項目の経験を設定し、それぞれについて「経験がある」、「少し経験がある」、「あまり経験がない」、「経験がない」の4件法で回答を求めた。

iii. 自身の家庭経験や母子家庭での悩みを打ち明ける経験の詳細

前項で実際に自分の家庭経験や母子家庭での悩みを誰かに打ち明けたことがあるかについて「ある」と回答した対象者に対し、打ち明けた相手と手段、打ち明けができた理由、打ち明ける機会があったことで得られた利点を尋ねた。

打ち明けた相手は、母子家庭の友人、ふたり親の友人、学校の教師、カウンセラー、きょうだい、同居親以外の親戚、支援団体のメンバー、不特定多数、その

他から、打ち明けた方法は対面、電話、LINE®などのコミュニケーションサービス、その他のソーシャルネットワークサービス、掲示板やインターネット上、支援団体主催のイベント、その他から、それぞれについて選択式で回答を得た。

打ち明けができた理由および打ち明ける機会があったことで得られた利点は、先行研究を参考にそれぞれ 4 項目、7 項目を設け、各設問に対して「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」の 4 件法での回答を求めた。

5. 調査方法

調査は 2018 年 11 月に、インターネット調査会社(株)アイブリッジに対象者の抽出およびデータ収集を委託して行った。インターネット調査会社(株)アイブリッジのモニター登録人数は約 440 万人であり、男女比は 4:6、このうち本調査の対象者となった 20 歳代は 13.6% (約 60 万人) となっている。まず、調査会社に会員登録されている 20 から 25 歳 (約 30 万人) のうち約 6% (1.8 万人) が適格基準を満たすと仮定し、対象者の条件に合致する集団を特定するため、第一段階として 20 から 25 歳の会員登録者に対して、本研究への適格性を確認するスクリーニング調査を行った。その結果、3,234 人が回答し、うち 301 人 (9.3%) が適格基準を満たした。第一段階で本研究の適格基準に合致する対象者に本調査の概要について説明のうえ、第二段階として母子家庭の語りの経験に関する質問への回答を依頼した。データ収集終了後、研究者は調査会社より匿名化されたデータを受け取った。

6. 分析方法

分析には SPSS version 20 を用いた。まず、全ての回答を単純集計した。次に、自分の家庭経験や母子家庭での悩みを誰かに打ち明けたいと思ったことがあるかの問いについて、「ある」、「少しある」と回答した者を打ち明けの考えあり群、「ほとんどない」、「ない」と回答した者を打ち明けの考えなし群の 2 群に、実際に自分の家庭経験や母子家庭での悩みを誰かに打ち明けた群と打ち明けなかった群の 2 群に分け、自身の家庭経験や母子家庭での悩みを話題にしようとした時の経験 10 項目についてそれぞれ Mann-Whitney の U 検定で比較を行った。自身の家庭経験や母子家庭での悩

みを語る経験は「経験がある」に 1 点、「少し経験がある」に 2 点、「あまり経験がない」に 3 点、「経験がない」に 4 点を配点した。

性別で 2 群、母子家庭となった理由で 3 群、母子家庭になった時期で 4 群に分け、2 群間は Mann-Whitney の U 検定で、3 群以上は Kruskal-Wallis 検定で自分の家庭経験や母子家庭での悩みを誰かに打ち明けたいと思った程度と実際の打ち明けるの有無を比較した。なお、自分の家庭経験や母子家庭での悩みを誰かに打ち明けたいと思ったことがあるかの問いは「ある」に 1 点、「少しある」に 2 点、「ほとんどない」に 3 点、「ない」に 4 点、実際に自分の家庭経験や母子家庭での悩みを誰かに打ち明けたかの問いでは「ある」に 1 点、「ない」に 2 点を配点した。有意水準は全て 0.05 とした。

7. 倫理的配慮

調査実施にあたり、東北大学大学院医学系研究科倫理委員会の承認を得た (受付番号: 2018-1-587)。

研究対象者に対しては、研究への協力は自由意思であること、研究協力を拒否しても不利益を被らないことをアンケートの回答前に説明し、内容を読んで理解した場合のみ、回答へ進んでもらった。データ収集は調査委託会社により行われ、調査委託会社のみが個人を特定できる情報を管理した。調査を委託したアイブリッジはプライバシーマークの認定を受けており、一般財団法人関西情報センター (KIIS) の規程に沿って個人情報を取り扱い、個人情報への配慮が十分になされた管理体制が整っている。回答者には調査会社より累積されると希望商品と交換が可能なポイントが付与された。

Ⅲ. 結 果

200 人の回答が得られ、全ての回答が有効回答であった (有効回答率 66.4%)。

1. 対象者の属性

結果を表 1 に示した。対象者の性別は男性 35 人 (17.5%)、女性 165 人 (82.5%) であり、母子家庭になった理由は、死別が 29 人 (14.5%)、離別が 162 人 (81.0%)、未婚が 9 人 (4.5%) であった。母子家庭になった時期は、生まれる前から 5 歳が 64 人 (32.0%)、6 歳から 12 歳が 65 人 (32.5%)、13 歳から 18 歳が 52 人 (26.0%)、

19歳から25歳が19人(9.5%)であった。

2. 自身の家庭経験や母子家庭での悩みの語りの実態

i. 誰かに打ち明けたいと思った経験と実際に打ち明けた経験

回答者のうち47人(23.5%)がある, 53人(26.5%)が少しあると回答し, 64人(32.0%)がほとんどない, 36人(18.0%)がないと回答した。打ち明けたいと思ったことがあるもしくは少しあると答えたのは100人(50.0%)であった。打ち明けたいと思ったことがあるもしくは少しあると答えた100人に実際に誰かに打ち明けた経験の有無を尋ねたところ, 65人(65.0%)がある, 35人(35.0%)がないと回答した。

ii. 母子家庭での家庭経験や母子家庭での悩みを話題にしようとした時の経験

結果を表2に示した。対象者の多くが, 経験があ

るもしくは少し経験があると回答したのは, 「母子家庭のことを言うと, 変に気を遣われたり同情されたりするのが嫌で, 話せなかった」122人(61%), 「父親と母親がいるのが普通だ, という周りの雰囲気を感じて言えなかった」104人(52%)であった。また, 「特別, 困難を感じたことがなく普通に話題に出していた」の経験では126人(63%)が, 経験があるもしくは少し経験があると回答した。

3. 自身の家庭経験や母子家庭での悩みを打ち明ける経験の詳細

自身の家庭経験や母子家庭での悩みについて, 実際に打ち明けたことがあると回答した87人に以降の回答を求めた。

i. 実際に打ち明けた相手と用いた手段

結果を表3に示した。打ち明けた相手は, ふたり親の友人が63人(72.4%), 同じ母子家庭の友人が48人(55.2%), 学校の教師が22人(25.3%)の順に多かった。その他の相手には, 恋人, 夫などが含まれていた。手段は, 回答全体の95%が対面と回答し, 10から20%の回答者は友人やきょうだいに対してLINE®をはじめとするソーシャルネットワークサービスを用いていた。

ii. 相手に自分の家庭経験や母子家庭での悩みを打ち明けることができた理由

結果を表4に示した。打ち明けた理由として尋ねた項目について, そう思うもしくはどちらかといえばそう思うと回答した人数は, 多い順に「気を遣わない

表1 背景属性

| 項目 | n (%) |
|------------|-------------|
| 性別 | |
| 男性 | 35 (17.5%) |
| 女性 | 165 (82.5%) |
| 母子家庭になった理由 | |
| 死別 | 29 (14.5%) |
| 離別 | 162 (81.0%) |
| 未婚 | 9 (4.5%) |
| 母子家庭になった時期 | |
| 出生前から5歳 | 64 (32.0%) |
| 6から12歳 | 65 (32.5%) |
| 13から18歳 | 52 (26.0%) |
| 19から25歳 | 19 (9.5%) |

表2 現在までの, 自身の家庭経験や母子家庭での悩みを話題にしようとした時の経験

| 質問項目 | 経験がある | 少し経験がある | あまり経験がない | 経験がない |
|--|-----------|-----------|-----------|------------|
| 1 父親と母親がいるのが普通だ, という周りの雰囲気を感じて言えなかった | 44 (22.0) | 60 (30.0) | 54 (27.0) | 42 (21.0) |
| 2 母子家庭の自分は周りとは違うと感じ, 言えなかった | 28 (14.0) | 55 (27.5) | 68 (34.0) | 49 (24.5) |
| 3 周りに母子家庭が少なく, 言い辛い雰囲気と言えなかった | 33 (16.5) | 48 (24.0) | 64 (32.0) | 55 (27.5) |
| 4 何か自分に問題があったりできないことがあったりすると, 母子家庭だからしょうがないという周りの偏見があり, 言えなかった | 8 (4.0) | 34 (17.0) | 59 (29.5) | 99 (49.5) |
| 5 母子家庭であることを恥ずかしいと思い言えなかった | 9 (4.5) | 42 (21.0) | 53 (26.5) | 96 (48.0) |
| 6 母子家庭のことを言うと, 変に気を遣われたり同情されたりするのが嫌で, 話せなかった | 46 (23.0) | 76 (38.0) | 36 (18.0) | 42 (21.0) |
| 7 話題にしようとしても気を遣われてわざと家庭の話避けられた | 12 (6.0) | 36 (18.0) | 54 (27.0) | 98 (49.0) |
| 8 母親や親戚から母子家庭であることを口にしないように言われていて話せなかった | 6 (3.0) | 24 (12.0) | 35 (17.5) | 135 (67.5) |
| 9 口にすることによって家庭経験を思い出すことが不安・恐怖で言えなかった | 7 (3.5) | 20 (10.0) | 42 (21.0) | 131 (65.5) |
| 10 特別, 困難を感じたことがなく普通に話題に出していた | 51 (25.5) | 75 (37.5) | 45 (22.5) | 29 (14.5) |

n=200, 人 (%)

表 3 実際に打ち明けた相手と用いた手段

| 相手 | 手段 | | | | | | | | 回答者 合計* |
|--------------|------------|----------|----------|---------------------------------|------------|---------------------|------------|-----------|------------|
| | 対面 | 電話 | LINE® | その他の SNS (Twitter® など) | ネット 掲示板 | 支援団体 主催の イベント | その他の 手段 | | |
| 母子家庭の友人 | 46 (95.8) | 6 (12.5) | 8 (16.7) | 3 (6.3) | 1 (2.1) | 1 (2.1) | 0 (0.0) | 48 (55.2) | |
| ふたり親の友人 | 60 (95.2) | 8 (12.7) | 8 (12.7) | 5 (7.9) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 63 (72.4) | |
| 学校の教師 | 21 (95.5) | 0 (0.0) | 2 (9.1) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 22 (25.3) | |
| カウンセラー | 11 (100.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 11 (12.6) | |
| きょうだい | 16 (100.0) | 1 (6.3) | 3 (18.8) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 16 (18.4) | |
| 同居親以外の親戚 | 12 (92.3) | 1 (7.7) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 13 (14.9) | |
| 支援団体のメンバー | 1 (33.3) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 2 (66.7) | 0 (0.0) | 3 (3.4) | |
| 不特定多数 | 2 (33.3) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 2 (33.3) | 2 (33.3) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 6 (6.9) | |
| その他 (恋人・夫など) | 16 (100.0) | 1 (7.1) | 1 (7.1) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 0 (0.0) | 16 (18.4) | |

n=87, *: 各相手の項目についていずれかの手段を回答した人数。カッコ内は n=87 で除した割合を示す。

*以外のカッコ内は回答者合計で割った割合を示す。

表 4 自身の家庭経験や母子家庭での悩みを打ち明けることができた理由

| 質問項目 | そう思う | どちらかと いえば そう思う | どちらかと いえば そう思わない | そう思わない |
|-------------------------------|-----------|----------------------|------------------------|---------|
| 1 信頼できる相手だったから | 63 (72.4) | 21 (24.1) | 2 (2.3) | 1 (1.2) |
| 2 家庭経験について、共感を得ることができる相手だったから | 41 (47.1) | 22 (25.3) | 19 (21.8) | 5 (5.8) |
| 3 気を遣わないで良い相手だったから | 65 (74.7) | 21 (24.1) | 1 (1.2) | 0 (0.0) |
| 4 母子家庭を特別視していない相手だったから | 54 (62.1) | 25 (28.7) | 8 (9.2) | 0 (0.0) |

n=87, 人数 (%)

で良い相手だったから」86人 (98.8%), 「信頼できる相手だったから」84人 (96.5%), 「母子家庭を特別視していない相手だったから」79人 (90.8%), 「家庭経験について、共感を得られる相手だったから」63人 (72.4%) であった。

iii. 打ち明ける機会があったことで得られた利点

実際に打ち明けたことがある 87 人に回答を求めた。結果を表 5 に示した。利点としてそう思うまたはどちらかといえばそう思うとの回答が多かったのは、順に「母子家庭での家庭経験を受け止められるようになった」70人 (80.5%), 「家庭経験から学び、他者に優しくしたり、思いやりたりできるようになった」67人 (77.0%), 「家庭経験から学び、困難に耐える強さを得た」62人 (71.2%) であった。一方、「進路選択や職業選択で人生の幅が広がった」では 40人 (46.0%) と、最も少なかった。

4. 自身の家庭経験や母子家庭での悩みを打ち明ける経験に影響を及ぼす要因

i. 自身の家庭経験や母子家庭での悩みを打ち明けたいと思った経験の関連要因

自身の家庭経験や母子家庭での悩みを打ち明けたいと思ったことがある群 (n=100) とない群 (n=100) の 2 群で、母子家庭での家庭経験や母子家庭での悩みを話題にしようとした時の経験を Mann-Whitney の U 検定で比較した。その結果、語れなかった経験に関する 9 項目全てで、打ち明けたいと思ったことがある群の方がいない群に比べ、語れなかった経験があったと回答した (表 6)。

ii. 自身の家庭経験や母子家庭での悩みを実際に打ち明けられた経験の関連要因

自身の家庭経験や母子家庭での悩みを実際に打ち明けた群 65 人と、打ち明けたいと思ったが打ち明けられなかった群 35 人の母子家庭での家庭経験や母子家庭での悩みを話題にしようとした時の経験を Mann-Whitney の U 検定で比較した (表 6)。その結果、「何か自分に問題があったりできないことがあったりする

表5 母子家庭での経験や悩みを打ち明けられたことで現れた変化

| 質問項目 | そう思う | どちらかといえ ばそう思う | どちらかといえ ばそう思わない | そう思わない |
|---|-----------|------------------|--------------------|-----------|
| 1 母子家庭での家庭経験を受け止められるようになった | 40 (46.0) | 30 (34.5) | 16 (18.4) | 1 (1.2) |
| 2 家庭経験から学び、他者に優しくしたり、思いやったりすることができるようになった | 35 (40.2) | 32 (36.8) | 16 (18.4) | 4 (4.6) |
| 3 家庭経験から学び、困難に耐える強さを得た | 29 (33.3) | 33 (37.9) | 18 (20.7) | 7 (8.1) |
| 4 自分自身を認められるようになった | 18 (20.7) | 37 (42.5) | 23 (26.4) | 9 (10.3) |
| 5 生きやすくなった | 23 (26.4) | 33 (37.9) | 19 (21.8) | 12 (13.8) |
| 6 進路選択や職業選択で人生の幅が広がった | 12 (13.8) | 28 (32.2) | 28 (32.2) | 19 (21.8) |
| 7 家庭でストレスを感じても上手く対処できるようになった | 15 (17.2) | 35 (40.2) | 26 (29.9) | 11 (12.6) |

n=87, 人数 (%)

表6 打ち明けたいと思ったことがある群とない群, 打ち明けた群と打ち明けられなかった群の得点の比較

| 質問項目 | 打ち明けたいと思 ったこと | | 実際に 打ち明けたこと | |
|--|------------------|-------|----------------|-------|
| | 上段:あり 下段:なし | p | 上段:ある 下段:ない | p |
| | 平均ランク | | 平均ランク | |
| 1 父親と母親がいるのが普通だ、という周りの雰囲気を感じて言えなかった | 76.1 124.9 | 0.000 | 52.2 47.4 | 0.406 |
| 2 母子家庭の自分は周りとは違うと感じ、言えなかった | 78.5 122.5 | 0.000 | 47.6 55.9 | 0.147 |
| 3 周りに母子家庭が少なく、言い辛い雰囲気と言えなかった | 76.1 24.9 | 0.000 | 54.3 43.4 | 0.062 |
| 4 何か自分に問題があったりできないことがあったりすると、母子家庭だからしょうがないという周りの偏見があり、言えなかった | 86.1 114.9 | 0.000 | 55.8 40.7 | 0.009 |
| 5 母子家庭であることを恥ずかしいと思言えなかった | 88.8 112.2 | 0.002 | 53.5 45.0 | 0.140 |
| 6 母子家庭のことを言うと、変に気を遣われたり同情されたりするのが嫌で、話せなかった | 76.0 125.0 | 0.000 | 53.5 45.0 | 0.130 |
| 7 話題にしようとしても気を遣われてわざと家庭の話避けられた | 83.8 117.2 | 0.000 | 52.2 47.4 | 0.406 |
| 8 母親や親戚から母子家庭であることを口にしないように言われていて話せなかった | 91.1 110.0 | 0.005 | 48.1 55.0 | 0.203 |
| 9 口にすることによって家庭経験を思い出すことが不安・恐怖で言えなかった | 91.6 109.5 | 0.009 | 51.0 49.6 | 0.805 |
| 10 特別、困難を感じたことがなく普通に話題に出していた | 107.6 93.4 | 0.070 | 47.6 55.9 | 0.147 |

平均ランクが小さいほど各質問項目の経験があることを示す。

打ち明けたいと思ったことがある群 (n=100), 打ち明けたいと思ったことがない群 (n=100)

打ち明けたいと思ったことがある群 (n=100) のうち、実際に打ち明けた群 (n=65), 実際には打ち明けなかった群 (n=35) で2群にしている。

Mann-Whitney の U 検定

と、母子家庭だからしょうがないという周りの偏見があり、言えなかった」経験を、打ち明けたいと思ったが打ち明けられなかった群の方が、実際に打ち明けた群よりも多くしていた。

自身の家庭経験や母子家庭での悩みを打ち明けたいと思った経験と自身の家庭経験や母子家庭での悩みを実際に打ち明けられた経験の背景因子の関連について、性別を Mann-Whitney の U 検定にて、母子家庭になった理由、母子家庭になった時期を Kruskal-Wallis 検定

にて解析したが、いずれも打ち明けたい欲求との関連は見られなかった。また、実際に打ち明けられたかどうかにも関連は見られなかった。

IV. 考 察

本研究により、母子家庭で育った青年の 50% が、自身の家庭経験や母子家庭での悩みを打ち明けたいと思った経験があることが明らかになった。そして、話題に出来なかった経験が、打ち明けたいという思いを

高めると示唆された。また、周囲に同じ母子家庭の子どもがいることや、気を遣わなくてよい相手や、信頼できる相手、母子家庭を特別視していない相手がいることが、語りを促進させると考えられた。さらに、打ち明ける機会があったことで得られた利点として、多くの回答者が家庭経験の受容の促進やポジティブな力への変換を経験していた。

1. 自身の家庭経験や母子家庭での悩みを語ること

本研究から、母子家庭の子どもの半数が打ち明けたい欲求を持ち、打ち明けたい欲求の35%が満たされていないことが分かった。本村⁵⁾が家庭生活のありようを安心して開示できる場所があることが母子家庭の子どもの精神的支援に有効であると明らかにしていることから、2人に1人という高い割合で自身の家庭経験や母子家庭での悩みを打ち明けたいと思っている母子家庭の子どもについて、打ち明けることのできる場が必要であることが量的に示唆された。

また、打ち明けたいと思ったことがある群は、打ち明けたいと思っただけで打ち明けない群よりも、母子家庭について話題にしようとした時に話題にできなかった経験を多くしていることがわかった。さらに、打ち明けたいという思いから実際に打ち明けるという行動を起こすかどうかに関連したのは、周りの偏見を感じる経験であった。これらの結果からは、子どもが周りに偏見があると感じているほど、打ち明けることが難しくなることが窺えた。母子家庭は現在では日常に見られる家庭構造だが、ふたり親家族を前提とする社会規範はまだ根強く残っている現実がある⁸⁾。そのために、母子家庭は社会規範からの逸脱としての「まなざし」を向けられ⁹⁾、母子家庭の子どもは、自分は普通ではないということを否定的に意識するようになる⁶⁾。さらに神原¹⁰⁾は、母子家庭の親と子どもの生きづらさについて、偏見や差別といった社会的排除を避けるために「ふつう」の家族を演じ続けなければならない状態であると述べている。こうしたアンビバレントな状態が打ち明けたいという気持ちを高めた可能性がある。

さらに、自身が母子家庭についてどのようなイメージを持つかは、自身が持っていたイメージと周りからのイメージの両方で決定される¹¹⁾。従って、話題にすることができないと母子家庭の子どもが考える背景は、子ども自身とその周囲の両側面から考えなければならない。つまり、子どもの周囲の人間一人一人が母子家

庭に対する自身の先入観を意識する必要がある。特に支援に当たる専門職者は支援者としての態度を問い直し続ける必要があると言える。

2. 打ち明けの相手と方法の特性

母子家庭で育つ子どもの数はふたり親の子どもの数の約10分の1^{1,2)}であるにも関わらず、同じ母子家庭の子どもに打ち明けている割合が55.2%と、ふたり親の友人の72.4%に迫る割合であった。これは、母子家庭の子どもが意図的に同じ母子家庭の人を語りの相手に選んでいることを表していると考えられた。周囲に同じ母子家庭の子どもがいることは、自身の家庭経験や母子家庭での悩みを語る機会を後押しすると推察された。加えて、実際に打ち明けられたことの理由として、高い割合で気を遣わなくてよい相手や、信頼できる相手、母子家庭を特別視していない相手がいることが明らかとなった。さらに、共感を得ることができる相手であったことを理由とした割合は、他の項目に比べて低かった。志田⁷⁾は語りの相手として同じ母子家庭の友人の存在が重要であると示しているが、母子家庭であるかどうかに限らず、自身にとって信頼できる友人の存在は打ち明けの相手として重要な役割を果たすと示唆された。

3. 打ち明ける機会があったことで得られた利点

打ち明ける機会があったことによって、約6割から8割の回答者が、母子家庭での家庭経験を受け止められるようになったり、家庭経験から他者への優しさや思いやりを学んだり、忍耐力を獲得できたりしたと感じていることが分かった。渡辺⁹⁾は、周囲が求める家族のあるべき姿に従う選択が、母子家庭である自らを否定的に解釈することにつながっていることを推察している。母子家庭の子どもは、家族を取り巻くさまざまな煩わしい出来事に対して承認を得る過程で自己の家庭経験を正当なものとして再解釈する⁷⁾。これらのことから、母子家庭での家庭経験を打ち明けありのままの自分を他者から承認されることが、自らと自らの家庭経験を肯定的に解釈することに繋がると考えられる。打ち明ける機会があったことで得られた利点には、家庭経験の受容や家庭経験のポジティブな力への変換が挙げられ、打ち明けたいと思っている子どもこそ打ち明けられるようにすることが重要であることが示された。そして、打ち明けるという語りの一側面からも、

語りが母子家庭の子どもの精神的支援として重要であることが明らかになった。一方で、打ち明けることによって人生の選択肢が広がると答えたのは半数以下であった。厚生労働省のひとり親家庭に関する調査³⁾では、母子世帯の総所得は全世帯の50%、児童がいる世帯の38%の額に留まることが報告されている。また母子家庭における子育ての課題として、母親に経済的・時間的余裕がない、周囲に相談できず子育てに自信が持てないために、子どもへの教育的関心や働きかけが弱くなるといったことがあることも明らかになっており、母親に対して経済的・時間的・精神的なゆとりを持たせるための包括的な生活支援や、母子が一緒に多様な経験をしたり母親以外の大人と進路や将来について話したりする場の提供などが、子どもが自らの進路や将来に対する希望や期待を高めることに寄与すると考えられている⁹⁾。母子家庭の子どもの将来選択が狭まっている現実に対しては、精神的支援だけに留まらず、こういった複合的な支援が必要であると考えられる。

本研究では明確に示されなかったが、母子家庭について語りたくないと思っている子どもや青年の存在も考えられる。従って、周りが語りを促すことには多面的な考慮が重要と言える。あくまでも、母子家庭の子どもの自分で語りを選択できるように、子どもの周りの一人一人がその環境に目を留める必要がある。母子家庭や病気をもつ子どもなどの社会的マイノリティに関する教育の充実は、その方略の一つの視点となると考えられる。加えて、本研究では支援団体のメンバーへの打ち明けを回答した者は1%にとどまっており、母子家庭の母や家庭そのものに対する支援に比べて子ども本人に支援の手が届きにくいと考えられることから、母子家庭の子どもの精神的支援の拡充として社会的な活動の活発化が望まれる。

4. 研究の限界

本研究では青年に調査を実施したため、今現在母子家庭で過ごす子どもの語りの実態を捉えているとは考えにくい。特に本研究で対象者とした20歳から25歳という時期には学生や社会人、結婚など環境のばらつきがあり、こうした環境が自身の経験に対する認識に影響を与えている可能性がある。また、本研究はWebを用いることで、国内で最大規模の母子家庭の子どもの対象者とした語りに関する調査が可能となった一方、

回答者の在住地域により受ける支援に差がある可能性がある。加えて、回答にはインターネットの利用が必要であるため、比較的メディアへのアクセスが容易な集団が抽出されている可能性があり、経済面などでの偏りを伴っている可能性があるほか、調査に到達する過程で母子家庭に対する関心が高い集団に偏って抽出されている可能性がある。さらに、データ収集を依頼した調査会社のモニター登録の男女比に対して、本調査では女性の占める回答の割合が極めて高く、母子家庭で育った男性の声について、今後より詳しく捉えていく必要がある。

V. 結 論

母子家庭で育った青年に対し、(1)自身の家庭経験や母子家庭での悩みの語りの実態、(2)家庭経験や悩みを打ち明ける意欲と行動に影響する要因、(3)打ち明ける機会があったことで得られた利点を明らかにすることを目的に調査を実施し、分析を行ったところ以下の結果が得られた。

1. 母子家庭の青年の半数が自身の家庭経験や母子家庭での悩みを打ち明けたいと思った経験があり、うち35%は打ち明けられていなかった。さらに、話題に出来なかった経験が、打ち明けたいという思いを高めると示唆された。

2. 周囲に同じ母子家庭の子どものいることや、気を遣わなくてよい相手や、信頼できる相手、母子家庭を特別視していない相手がいることが語りを促進させると考えられた。一方、周囲の偏見を感じることで悩みを打ち明けることを躊躇させていた。

3. 打ち明ける機会があったことで得られた利点として、約6割から8割の回答者が家庭経験の受容の促進やポジティブな力への変換を経験していた。

学会発表・研究費助成等

本研究は第22回北日本看護学会学術集会で口演発表した内容を一部改変したものである。本研究は石田彩花の2018年度東北大学医学部保健学科看護学専攻卒業研究論文の内容を一部改変したものである。

利益相反

研究について申告すべき利益相反はない。

文 献

- 1) 厚生労働省. “平成28年度全国ひとり親世帯等調査

- 結果の概要”. <http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouuhappyou-11923000-Kodomokateikyoku-Kateifukishika/0000188136.pdf> (参照 2018.05.10)
- 2) 厚生労働省. “平成 28 年国民生活基礎調査の概況 (I 世帯数と世帯人員の状況)”. <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/dl/02.pdf> (参照 2018.05.17)
 - 3) 厚生労働省. “ひとり親家庭等の支援について”. <https://www.mhlw.go.jp/content/000539080.pdf> (参照 2020.02.04)
 - 4) 飯田豊浩. 弁護士から見た少年非行—近年の少年非行の特徴と変化—. 思春期学 2017; 35(1): 23-27.
 - 5) 本村めぐみ. ひとり親家族を生きる子どもの発達支援—子どもたちへのインタビュー調査を通して—. 和歌山大学教育学部紀要 2011; 教育科学 61 巻: 127-135.
 - 6) 上野顕子, 李 璟媛. 離別によるひとり親家庭で育った大学生のライフヒストリー. 日本家政学会誌 2014; 65(1): 27-36.
 - 7) 志田未来. 子どもが語るひとり親家庭—「承認」をめぐる語りに着目して—. 教育社会学研究 2015; 96: 303-323.
 - 8) 松本洋人. 子育て支援の社会学 社会科のジレンマと家族の変容. 第 1 刷. 東京: 新泉社, 2013.
 - 9) 渡辺 恵. 地域子育て支援における課題を考える—ひとり親家族に関する最近の研究を手がかりに—. 杏林大学研究報告 2020; 37: 35-45.
 - 10) 神原文子. 子づれシングル女性の生きづらさ—奈良市ひとり親家庭等実態調査より—. 新社会学研究 2016; 1: 137-158.
 - 11) 片桐雅隆. 自己と「語り」の社会学—構築主義的展開. 第 1 刷. 京都: 世界思想社, 2000.

[Summary]

The authors aimed to assess experiences of disclosing (narratives), factors motivating to disclose, and benefits obtained by disclosing their distress on their family history among adolescents raised in single parent (mother) households. We recruited participants aged 20-25 years old on the web from the registered monitors. We prepared multiple-options to inquire the strength to motivate to disclose, factors preventing/promoting their disclosing, and benefits obtained from the disclosing. As a result, 200 adolescents answered. Of them, 100 respondents affirmed the urge to disclose, and 65 had disclosed elsewhere. In many respondents they could not disclose due to assumed prejudice. In addition, many of them disclosed to the peers in similar households, professionals, or non-intimate figures on the social networks. The majority of the respondents mentioned merit in disclosing as feeling of being accepted. The cause of single households, age and gender of respondents did not statistically related to the urge to disclose. Nevertheless, because of many benefits from disclosing our results suggest that the professionals need to preclude their own prejudice on the single parent households and to provide appropriate time-place-opportunity for disclosing their distress.

Key words: single-mother household, young adult, child, disclosure, prejudice